

2度目のさくら道を走って

No. 86 小川直哉

またこの大会に戻ってこられた。そんな思いだった。

6年前にもこの大会に出た。当時、まさか選考してもらえとは思っていなかった。無謀な挑戦だったが、途中で倒れたり走れなくなったりしながらも何とかゴールできた。代償は大きく、膝も足首も倍に膨れ上がり、レース後は数ヶ月まともに走ることはできなかった。

振り返るとあの大会が自分のランニングのターニングポイントの1つだった。あのさくら道のおかげで新しい世界を知ることができ、そして新たな喜びも知ることができたように思う。

あの時選考してくださったことに心の底から感謝している。

あれから6年。また、この大会のスタートラインに立つ権利をもらった。あの時と比べて経験も積んでいたし、走りきれぬ自信もあった。

しかし大会2か月前に左膝に違和感が出てきた。そこからは思うように走れず、走ることもつまらなくなり、モチベーションは下がるばかりだった。

ただ今回のさくら道は、どうしても走りたかった。選考対象レースの期限的に今年が最後のチャンスだったから。

さくら道をまた走りたいと思った理由は幾つかある。6年前に余裕がなさすぎて感じられなかった、この大会の素晴らしさを知りたかったから。あの時リタイヤを口にしようとした自分に、進めと言ってくれたドクター、疲れすぎて無愛想な自分を温かく迎えてくれたエイドスタッフの方に楽しく走る姿を見てもらいたかったから。そして、当時、一緒に無謀な挑戦に誘ってくれた小谷君が出場するから。

当日、心配だった膝が痛むことはなかった。一方で胃腸が140kmくらいで苦しくなり、白湯ばかり飲んでた。またそのくらいから歩きも増えた。風も強くなるなか、足の踏ん張りがきかなくなり、ガードレールから落ちそうになることもあった。しかし全く走れないという状態ではなく、ペースは遅いながら確実に進んでいた。6年前に比べたらはるかに余裕があった。自分自信でこの6年間の進歩を如実に感じることもできた。

ただそれは裏を返せば、楽をしてしまっている、出し切れていない状態でもあった。そこそこの走りに甘えてしまっている状態。自分の心に正直になれば、若干の不安はありつつも、レーススタート前から完走はできるだろうと思っていた。でありながら完走を目標にして楽をしている自分がいた。

230kmで暴風によってレースは終わった。懸命な判断だったと思う。あと金沢まで20kmスパートと思っていただけに、不完全燃焼は否めなかったが。でもそれはおそらく、あと20kmゆえの不完

全燃焼ではない。最初から最後まで余裕を残したまま走っていたことによる不完全燃焼であり、あのままゴールできたとしてもどこか物足りない感じは残ったことと思う。

自分はきっともっとやれるはず。6年前にさくら道を走りきった自分のように、挑戦する心をまた持ちたい。この大会を自分にとっての第2のターニングポイントにできたらと思う。

物足りなさはあったが、それでも走ることは楽しかった。この4日間は、これ以上ないくらいに幸せだった。懐かしいメンバー、新しい友人、また日本だけでなくフランス、フィンランド、スイス、タヒチ、ブラジル、韓国、そして台湾からの多くのランナー達、おそらく彼らも同じように感じていたのではないかと思う。

この感覚が、佐藤良二さんが桜を植えることで達成しようとしたことではないだろうか。走りを通して、こうした喜びを広めていくのが、このさくら道の意味ではないだろうか。

話は変わるが3年前、僕は右も左もわからず、言葉も分からないなか、たった一人でデンマークに赴任になった。頼れる人もいないなか、僕を救ってくれたのは走ることだった。"250kmも走る奴がいる"を話題にいろいろな人が自分に興味を持ってくれた。そしてcrazyだと言いながら、拙い僕の話を楽しんでくれた。それがきっかけでウルトラマラソンに挑戦してくれた人もいた。本当にさくら道に救われたと思った。

佐藤さんが日本海と太平洋を桜でつなげようとしたように、海外ランナーが日本で僕らと喜びを共有してくれたように、僕も海の向こうへと喜びをつなげていきたい。走ることの楽しみをより多くの人と共有していけたらと思う。

6年前から大きく生活は変わったし、世の中も変わった。当時スマホはなかった。東北大震災も起こる前だった。UTMFもなかった。自分も歳をとったものだなあと感じる。と大先輩方を前に言うのは憚られるが。でもそんな中でも変わらないものがある。例えば人の温かみ、コース、自然、頑張る心。250kmを走るという原始的なこと。さくら道はそんな変わらないものを教えてくれる。それゆえの優しさと厳しさがある大会である。

それを再び感じるために、またいつかこの大会に戻ってきたい。

そして走ることの喜びをまたここにいる多くの人と共有したい。それができると感謝したい。

でもそれまでには、もう一度挑戦する心を取り戻してこようと思う。